

地域の町おこしに貢献しているクラブ

佐野中央スポーツクラブ ～地域のスポーツ行事を活性化!～



キーポイント

- 活動停滞しかけたスポーツ行事をクラブが活性化
- これまでスポーツに関わることが少なかった地域住民を巻き込む
- 地域の主要な行事に携わることでクラブの認知度向上

1 クラブがスポーツ行事運営に携わる!

「佐野中央スポーツクラブ(以下、クラブ)」(栃木県佐野市)が設立されたきっかけは、これまで町のスポーツ活動を支えていた町体育部(地区体育協会)が活動停滞したことに始まります。クラブが所在する出流原町では、これまで町体育部が運営中心となり開催されていた「春の運動会」「秋の球技大会」「冬の駅伝大会」という3大スポーツ行事がありましたが、平成17年頃から、人材不足によりそれら行事の存続が危ぶまれてきました。その際に、県体育指導委員協議会(現スポーツ推進委員協議会)の副会長が、町に総合型クラブを創ることでこの状況を打開しようと動き出し、平成19年にクラブを設立しました。

開催の危ぶまれた3大スポーツ行事の運営を立て直すべく、クラブはまずスポーツ行事を主催する行政と行事運営に町体育部と同様に深く携わっていた町内会への交渉を行いました。クラブは町内会の会議において、総合型クラブに関する説明会を開催し、総合型クラブが地域づくりに貢献していく組織であるということを熱心に訴えました。当初は「総合型クラブ」という仕組み自体を理解してもらおうのが大変だったそうです。やがて、町内会の理解もいただきクラブがスポーツ行事に関わることができるようになりました。

2 工夫した点は「一堂に会する場を効果的に活用する」こと!

出流原町は人口1,080名の規模の小さな町であるため、地域の方々は地域の色々な団体の役職を兼務していることが多いです。そこでクラブでは、町内会の会議終了と同時にクラブの運営委員会を開催することとしました。町内会は地域の各種団体からの参加者がいるので、効果的にその場を活用することができます。その際、町の区長や体育部長の代表の方にも委員となってもらっています。

3 より多くの地域住民がスポーツ行事に携わる

スポーツ行事の運営主体が町体育部からクラブに移ったことで得られた最も大きな成果は、より多くの地域住民におけるスポーツに関わるきっかけ作りができたことです。

現在、クラブでは3大スポーツ行事運営のほか、出流原小学校体育館及びグラウンド等を利用して、ヨガ教室、バドミントン教室、ソフトボール教室を実施しています。これまでスポーツにあまり関わりがなかった方々も対象としているため、教室に参加することで、やがてスポーツ行事の運営にも自然と参画してもらえるようになり、これまで以上にスポーツ行事が活性化できるようになりました。

クラブにとっては、地域の主要な行事であるスポーツ行事にクラブが関わることで、クラブが町に存在する価値を高められ

ているようです。またクラブの広報紙を年3回、全戸配布していることもあり、現在では住民の多くがクラブのことを知っているそうです。クラブマネジャーの神山氏によると「この地域にクラブがなかったら、町内のつながりが希薄になり、地域コミュニティがなくなって、地域がバラバラになっていただろう」ということでした。



4 今後の展望

町おこしは誰かに頼るのではなく、そこに住んでいる住民が「自分たちの住んでいる地域は自分たちで何とかしないといけない」という気持ちを持つことが大事です。

今後のクラブとしては、町の公民館が将来的に新しくなる際には、その一角に楽しく体を動かして集えるような場所、そこに行けばいつも誰かがいて世間話ができるような場所を作りたいと、神山氏はおっしゃっていました。

(栃木県クラブアドバイザー 宮本栄子)

クラブプロフィール

設立年月日：平成19年3月3日

地域：栃木県佐野市出流原町

運営：会員数 1,080名(平成25年8月現在) 予算規模 約150万円(平成25年度)

特徴：出流原町に住んでいる人が全員会員である。出流原町自体が総合型地域スポーツクラブになっている

連絡先：〒327-0102 栃木県佐野市出流原町13271

かみやま ひさお
神山 久夫

TEL:0283-25-0743/FAX:0283-25-0944

E-Mail: kamiyamahisao@sctv.jp

[INDEXへ▲](#)

地域の町おこしに貢献しているクラブ

クラブ香美 ING ～地域と協働し伝統行事を復活～



キーポイント

- 地域住民や大学生と協働して、地域の伝統行事を復活
- 地域の活気や人と人とのつながりをつくる
- 地域の主体性を活かし、様々な組織と協働することが大切

1 クラブ概要

「クラブ香美ING(以下、クラブ)」(高知県香美市)は、市民の有志が集い、「市民の健康づくり、人づくり、まちづくりを目指す」ことを目的に、平成23年2月に設立しました。現在は、香美市内の小学校体育館、地域の公民館などで14教室を展開しています。

香美市土佐山田町平山地区は、少子高齢化と過疎化が進む典型的な中山間地域ですが、地域活性化に向けて、熱心なまちづくりに取り組んでいます。クラブは、平山地区にある地域交流施設「ほっと平山」内に事務所を置いています。

2 地域住民や大学生と協働して地域の伝統行事を復活!

クラブでは、地域住民と高知県立大学地域文化論ゼミの大学生と協働して、平成24年11月に地区運動会、平成25年8月に夏祭りを復活させるまちづくりイベントに協力しました。開催のきっかけは平山地区住民の要望です。平山地区では、地域の交流拠点になっていた旧平山小学校が平成17年に閉校となったことに伴い、地区運動会と夏祭りも行われなくなり、地域住民の交流の機会が減りました。そこで、ゼミ合宿が「ほっと平山」で行われたことから交流が始まった高知県立大学地域文化論ゼミの学生とともに、地域の伝統文化である地区運動会、夏祭りを復活開催することとなりました。

運営や経費について

(1)地区運動会		(2)夏祭り	
運 営	主として大学生が企画し、クラブはサポート役 クラブマネジャーが会場設営や当日運営を支援 クラブ会員が準備体操の指導を協力 大学生20名、クラブ5名	運 営	企画からクラブマネジャーが参画 当日はゲーム(1ブース)の出店を行う 大学生18名、クラブ8名
経 費	香美市のまちづくりに係る助成金を活用 (20万円)	経 費	学生の交通費等に高知県の助成金を活用 (5万円)

経費面では、地区内外からも寄付を募りました。

3 地域が活気を取り戻す!

地域の伝統行事である運動会、夏祭りを復活したことで、地区内外から多くの人々が訪れ平山地区に活気が生まれました。運動会では、参加者がスポーツを「する」「みる」、スタッフが運動会を笑顔で「支える」ことを通じて楽しみました。運動会后、地域のあるお年寄りには「いつも見ん人を久しぶりに見た!」と言われるなど、地域でも大きな反響がありました。

夏祭りでは、会場内の各所に、語らいの輪ができていました。夏祭りの最後は、打ち上げ花火を行いました。約10分間と短いものでしたが、1発1発に地域の人々の想いが彩られ、平山の夜空を輝かせました。感激のあまり、地域住民や大学生は涙

を流し、歓声を上げて喜んでいました。これが地域の運動会や夏祭りの社会的な役割だと思います。

地域住民が楽しみながら、普段はなかなか会えない方々とお互いの近況を確認し合う場である運動会や夏祭りは、地域の伝統文化です。こういった失われつつある地域の伝統文化を復活させることは、必ずまちづくりにつながっていきます。

クラブでは、伝統文化の継承という観点から、平山地区の棚田で米作りも行っています。この取組みにも、地域住民や学生から多くの協力を受けました。今年(平成25年)の秋には稲刈り、冬には餅つき大会を行います。



4 地域の主体性を活かし、様々な組織と協働することがポイント

クラブが行うこれらの取組みのポイントは、地域住民や大学生との「協働」です。クラブが地域を巻き込んで、突っ走ってきたわけではありません。地域住民や学生と何度も話し合い、じっくりと取組みの構想を固めてきました。地域のまちづくりの主役は、その地域に住む人々でなければなりませんし、そうでなければ持続的な活動にはなりません。また、さまざまな組織が協働して行うことで、クラブマネジャーにかかる負担も少なくて済みます。私たちのような規模の小さなクラブが活動を継続するためには、できるだけ負担を分散し、協力関係を作っていくことが重要だと考えます。

現在、地域との協働関係が機能しているのはイベント事業だけですが、日々のクラブ活動においても、もっと多くのボランティアに関わってもらうことが重要だと思っています。多くの地域住民が関わることで「私たちのスポーツクラブ」になるでしょうし、そこでの人と人とのつながりが、次のまちづくりにつながるはずです。

(クラブマネジャー 阿部香織)

クラブプロフィール

設立年月日：平成23年2月20日

地域：高知県香美市全域

運営：会員数…150名(平成25年8月15日現在)
予算規模…約980万円(平成24年度)

特徴：香美市民の健康づくりを主に担おうと努力している

連絡先：住所…高知県香美市土佐山田町平山459(ほとと平山内)

TEL…0887-53-4461

FAX…0887-53-7178

E-mail… club-coming@ivy.ne.jp

URL…http://blog.livedoor.jp/club_coming/

[INDEXへ▲](#)

地域の町おこしに貢献しているクラブ

波佐見ルピナス倶楽部 ～「ご当地ヒーロー」を結成～



キーポイント

- ご当地ヒーローを結成し、地域のイベントに参画
- イベントの活性化とクラブの認知度向上につながる
- できる限りコストをかけずに運営

1 クラブの設立経緯

「波佐見ルピナス倶楽部(以下、クラブ)」「(長崎県波佐見町)は、平成23年8月1日に設立され「仲間づくり」「健康づくり」「生きがいづくり」を基本理念とし、波佐見町総合文化会館を拠点に、「健康エクササイズ」をはじめ20教室で活動しています。

クラブには「楽しくワクワクするようなクラブを創りたい」という熱意を持った有志が集まっています。



2 町おこしに貢献したご当地ヒーロー「はさみ炎レンジャー」

設立当初、クラブの運営スタッフには町議会議員、スポーツ推進委員、スポーツ少年団、少林寺拳法関係者などが入っていましたが、その中に現在クラブマネージャーである川口さんがいました。川口さんはクラブに関わる以前に「波佐見陶器まつり」を運営する波佐見焼振興会の職員でした。波佐見陶器まつりとは毎年ゴールデンウィーク(4月29日～5月5日)に開催される県下最大の焼き物の祭りです。クラブに川口さんが関わっていたことから、平成24年に波佐見焼振興会より「陶器まつりにクラブも協力してほしい」という相談を受けました。

クラブとしても地域の一大イベントである陶器まつりに携わりたいと考えた結果、ご当地ヒーロー「はさみ炎レンジャー」を結成しました。

結成の理由

- 波佐見町にはご当地ヒーローがいなかった
- クラブが目指している「楽しくワクワクするようなクラブ創り」にかなう
- クラブ会員にもこの取組みに参画していただけた

クラブでは平成25年度の陶器まつりにおいて3日間、1日3回公演の「はさみ炎レンジャー」のヒーローショーを陶器まつり特設会場にて行いました。日頃のクラブ運営の合間に川口さんが台本を作り、アクションや立ち振る舞いの練習をしましたが、直前まで全員そろった練習ができなかったなど、苦労はたくさんあったようです。それでも「波佐見に来てよかった」と言ってもらえるようおもてなしの心構えを常に念頭に置いて活動した結果、観客が数百名を超えて大盛況でした。

ご当地ヒーロー「はさみ炎レンジャー」に係る経費

科 目	費 用	備 考
人 件 費	0 円	クラブスタッフや会員 (9 名)
交 通 費	4,500 円	500 円 /1 人 ×9 名
コスチューム代	24,000 円	1 着あたり 3,000 円 ×8 着
合 計	28,500 円	

※運営をボランティア、小道具を段ボールで手づくりするなど極力経費は抑えました。



3 祭りの活性化とクラブの認知度向上に貢献

クラブの取組みで良かった点は2点あると考えられます。

(1)町として力を入れている陶器まつりの活性化に貢献できたこと

(2)ヒーローショーというオリジナリティのある取組みによりクラブの認知度向上につながったこと

特に上記(2)については、一般的に総合型クラブでは、地域のイベントでスポーツ体験コーナーなどのブースを設置することが多いですが、今回のような取組みでは、例えばスポーツに関心のない方の目にも触れる機会となります。公演中に直接的なクラブの宣伝はありませんが、後々の問い合わせなどからクラブの存在を知ってもらい、結果的に広くクラブを周知するきっかけになりました。

このヒーローショーがきっかけとなり、町のイベントなどにも出演要請があるそうです。

4 今後の展望

クラブでは、今後の活動に向けて4つのテーマを掲げています。

○「チームルピナス」宣言

クラブ全体を家族としてとらえ、家族全員で笑い、楽しみ、クラブに来ることがワクワクするようなクラブづくりを目指します。

○クラブハウスの充実

スタジオ、研修室だけでなく、憩いの場作りやサロン機能を完備したカフェづくりを目指します。

○クラブ内大運動会

クラブのユニフォームを着て、スポーツ教室、サークルという枠を超え楽しむことができる運動会の開催を目指します。

○魅力あるプログラムの提供・質の高い指導者とスタッフの育成

アンケート調査を実施し、設立当初の考えでもある会員がやりたい種目の充実、またスタッフも会員も共に考え、魅力あるプログラムの提供を目指します。

最後に川口さんからは「実現できる、できないは別として行動することが大事です!」と話していただきました。

(長崎県クラブアドバイザー 田原由美)

クラブプロフィール

設立年月日：平成23年8月1日

地域：長崎県東彼杵郡波佐見町(地場産業の波佐見焼が有名)

運営：会員数 221名
予算規模 1,100万円(平成25年度)

特徴：若い世代のスタッフが中心となり運営している

連絡先：〒859-3701長崎県東彼杵郡波佐見町折敷瀬郷1778-2

TEL/FAX:0956-59-8969

E-mail: a-lupine.hasami@titan.ocn.ne.jp

HP: <http://blog.canpan.info/a-lupine/>

波佐見ルピナス倶楽部

検索



[INDEXへ▲](#)

近隣クラブと連携しているクラブ

館林西スポーツクラブ、めいわスポーツクラブ ～指導者派遣から会員の相互交流へ～



キーポイント

- クラブが近隣クラブへ指導者を派遣することで新規教室開設
- 新規教室開設からクラブ内指導者の養成につながる
- 両クラブ会員の相互交流につながる

1 連携の概要

「館林西スポーツクラブ」(群馬県館林市)と隣町の「めいわスポーツクラブ」(群馬県明和町)では、めいわスポーツクラブで新規教室を開設する際に館林西スポーツクラブが指導者を派遣したことから指導者の養成に発展し、現在では会員間の相互交流が行われています。

2 指導者派遣から新規教室を開設!

館林西スポーツクラブは、ラジオ体操愛好者が設立したクラブであることからラジオ体操教室を取り入れています。連携のきっかけは、平成24年にめいわスポーツクラブの武井副理事長より「ラジオ体操教室を開催したい」と館林西スポーツクラブに要請があったことに始まります。要請を受け、NPO法人全国ラジオ体操連盟公認の「1級ラジオ体操指導士」資格を保有している館林西スポーツクラブの石山理事が、平成24年度からめいわスポーツクラブのラジオ体操教室の指導を行いました。

その後、めいわスポーツクラブ内からラジオ体操指導士資格を取得したいという要望が出てきたため、館林ラジオ体操協会の事務局長である石山理事が協会に要請し「ラジオ体操(第1及び第2)・みんなの体操指導者養成講習会」を開催しました。結果、めいわスポーツクラブ内に10名のラジオ体操指導員資格保有者を育成することができました。

現在、めいわスポーツクラブでは、毎朝6時30分と毎週土曜日9時30分からラジオ体操教室を開催し、20名でラジオ体操を楽しんでいます。





3 会員の相互交流に発展!

館林西スポーツクラブとめいわスポーツクラブでは、ラジオ体操教室での指導者派遣を契機に会員の相互交流が行われています。

館林西スポーツクラブが県内外のゴルフ場で毎月第3水曜日に開催しているゴルフ教室には、めいわスポーツクラブの会員も参加できることとなっており、交流を深めています。両クラブの会員であれば自由に参加でき、参加料などの必要経費は参加者それぞれで支払っています。

また、両クラブではともにスポーツ吹き矢教室を開催しており、同じ指導者のもとで行っていることもあります。スポーツ吹き矢協会で開催する大会には、両クラブから参加しています(参加料:1人当たり500円)。

今後は、両クラブ共催によるスポーツ吹き矢交流大会も実施していく予定です。



(群馬県クラブアドバイザー 梅澤 光枝)

館林西スポーツクラブ

設立年月日：平成22年2月26日

地 域：館林西公民館及び第十小学校区・4,000世帯対象

運 営：会員数242名(平成25年7月現在) 予算規模：約240万円(平成25年度)

連 絡 先：〒374-0042群馬県館林市近藤町178-39 第十小学校気付

TEL:080-1301-1212

E-Mail: kazumi-2@mpd.biglobe.ne.jp

めいわスポーツクラブ

設立年月日：平成23年2月27日

地 域：明和町全地域

運 営：会員数70名(平成25年4月現在) 予算規模：約20万円(平成24年度)

連 絡 先：群馬県邑楽郡明和町南大島1105-2

TEL:0276-84-3382

E-Mail: h.takei@hb.tp1.jp

[INDEXへ▲](#)

近隣クラブと連携しているクラブ

NPO 法人調和 SHC 倶楽部・
NPO 法人地域総合スポーツ倶楽部ピボットフット・
NPO 法人コミュニティネット SSC 大泉・
NPO 法人高津総合型スポーツクラブ SELF
～エリアを超えた近隣 4 クラブによる連携～



キーポイント

- 同じ事業や活動に取り組むクラブ同士で情報共有
- 共通課題の解決に向けた合同研修会を開催
- お互いのクラブが持つ工夫や取り組みを共有できる

1 連携事業のきっかけ

文部科学省ではスポーツ基本法の制定を受けて、平成23年度に「スポーツコミュニティの形成促進」事業、平成24年度から「地域スポーツとトップスポーツの好循環推進プロジェクト」事業を実施しており、「NPO法人調和SHC倶楽部」（東京都調布市）は近隣の地域スポーツクラブをはじめとする各種団体と連携する「拠点クラブ」として本事業を受託しました。

本事業では、

- ①トップアスリート等によるジュニアアスリート支援等の実施
- ②地域の課題解決に向けた取組の推進
- ③小学校体育活動コーディネーターの派遣

という3つのテーマに取り組んでいますが、初めての試みであるため色々と苦労していました。そこで、近隣で同事業を受託している「NPO法人地域総合スポーツ倶楽部ピボットフット」（東京都大田区）、「NPO法人コミュニティネットSSC大泉」（東京都練馬区）、「NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF（神奈川県川崎市）」の3クラブのプロジェクトリーダーが、各々の活動を円滑に推進する上での企画・運営のポイントを互いに持ち寄って、より質の高い事業を推進するための情報交換会を実施しました。

2 連携事業の内容

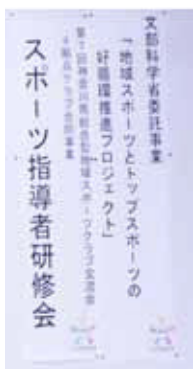
4クラブは1～2ヶ月に1回程度の会合を行い、それぞれのクラブが事業を進める上での困りごと・悩みごと、各クラブで取り組んでいる工夫などを共有しています。また、新しいアイデアを考案し、事業を進める上での課題について文部科学省に提言も行っています。

特に「質の高い指導者」を育成し、活動の質を高めることが本事業を推進する上で非常に重要なポイントであるという共通認識のもと、クラブの指導者を対象とした4クラブ合同の研修会を平成24年11月25日に開催しました。（4クラブ以外からの参加者もありました）

当日はメンタルトレーニング・コンサルタントの大儀見浩介氏、ロンドンオリンピック男子サッカーチームGKコーチの藤原

寿徳氏、サッカー元日本代表秋田豊氏という大変素晴らしいパネリストをお迎えし、非常に中身の濃いパネルディスカッションを実施することができました。

事業終了後にもここまで苦労して取り組んできた活動を継続することを視野において、行政や企業との連携を検討しています。



3 連携事業で得られたもの

国としての新たな取り組みであるため、各クラブが試行錯誤する中、他クラブでの優れた取り組みや工夫を自クラブにも取り込むことによって、質の高い事業を推進することができています。

また、各クラブ単位で開催するレベルではお呼びできないような素晴らしい講師の方々に講演していただき、大変質の高い研修会を開催することができました。研修会では、クラブで現場を持っている指導者同士が他クラブの指導者の考えや課題を共有する機会となり、各指導者にとっても大変意義深い場にすることができました。

1クラブでは限度がある活動でも、各クラブが持つ人脈などを持ち寄ってフルに活用することで、「1+1」が5や10になるような相乗効果を生み出すことができています。

4 今後の展望

本事業も3年目を迎え、各クラブが蓄積しているノウハウを互いに共有することでさらに効果的な事業推進を行う一方で、今年度は「拠点クラブ」としての新たな取組みとして「次世代のスポーツクラブ経営者の育成促進を目的とする合同研修会」を実施し、様々な団体とこれまで以上に連携するきっかけ作りを行うことを予定しています。

また、本事業終了後にもこれまで培ってきたことをさらに展開することができるよう、行政、企業、各種団体と連携し、様々なことにチャレンジしていきたいと考えています。



(NPO法人調和SHC倶楽部 理事 佐野 宏)

NPO法人調和SHC倶楽部

設立年月日：平成14年9月

地 域：東京都調布市とその周辺の地域

運 営：会員数…1,147名(平成25年3月時点) 予算規模…約3,000万円(平成24年度)

連 絡 先：〒182-0007 東京都調布市菊野台3-27-40

TEL・FAX:042-498-8828

E-Mail: info@npo-chowashc.jp

URL: <http://npo-chowashc.jp>

※NPO法人調和SHC倶楽部では、「地域スポーツとトップスポーツの好循環推進プロジェクト」事業に関する情報発信サイトを運営しています。 <http://enjoy-sports.org>

NPO法人地域総合スポーツ倶楽部ピボットフット

設立年月日：平成4年12月26日

地 域：東京都大田区

運 営：会員数…約400名

連 絡 先：〒143-0027 東京都大田区中馬込 1-1-17-504

TEL/FAX:03-3776-5113

URL: <http://p-foot.jp/>

NPO法人コミュニティネットSSC大泉

設立年月日：平成15年8月13日

地 域：東京都練馬区

運 営：会員数…約1,200名(平成25年度) 予算規模…約7,500万円(平成25年度)

連 絡 先：〒178-0061 練馬区大泉学園町5-14-24 区立大泉学園町体育館内

TEL/FAX:03-3921-1300

E-mail: ssc-oizumi@nerimassc.gr.jp

URL: <http://nerimassc.gr.jp/sscoizum/>

NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF

設立年月日：平成18年2月26日

地 域：神奈川県川崎市高津区

運 営：会員数…1,620名(登録数4,659名) 予算規模…24年度決算252,526,000円

連 絡 先：〒213-0011 川崎市高津区久本3-11-2 川崎市立高津中学校内

TEL:044-833-2555 FAX:044-833-2555

E-Mail: info@takatsuself.com

URL: <http://takatsuself.com/>

近隣クラブと連携しているクラブ



「スポーツ・レクリエーション倶楽部くせ」「しらうめスポーツクラブ」

～共同から協働へ～



キーポイント

- 県連絡協議会の制度を活用し連携
- 2クラブで新規事業を展開
- より密接に連携する「協働」へ発展

1 連携事業の概要

岡山県真庭市にある「スポーツ・レクリエーション倶楽部くせ(以下、スポレくせ)」と「しらうめスポーツクラブ(以下、しらうめSC)」では、合同で雪山イベントを行ったことを契機に以下の連携事業を行っています。

事業概要

事業名(1)	雪山イベント スキー教室&スノーシュー in 大山
経緯	両クラブがそれぞれ冬季に雪山イベントを行っていた
運営面	両クラブ名で募集案内 スポレくせがスノーシュー教室を担当、しらうめSCがスキー教室を担当。また、どちらの事務局でもイベントの問合せ・受付を可能とし、全体の準備はお互いの事務局が分担・連携
良かった点	会員にとっては種目の選択肢が増えた。クラブにとっては指導者の有効活用・事務局の業務分担・参加が少なかった年齢層の参加を促進(スポレくせ：子ども、しらうめSC：中高年)

事業名(2)	ソフトバレーナイターリーグ交流戦
経緯	それぞれが違う時期に、2～3週間の夜間リーグを開催していた
運営面	2～3カ月間のリーグ戦を合同で開催 お互いの役員と事務局で業務分担
良かった点	会場が広くなり、対応できる試合数が増えたことで、地区内に限っていた募集を、市全域に広げることができ、より多くのチームと試合ができるようになった 準備・運営を分担することで業務の軽減ができた

事業名(3)	夏まつり
経緯	しらうめSCからクラブの認知度向上と、地域活性に向けてイベントを行いたい旨の相談があった
運営面	両クラブで実行委員会を組織
良かった点	1,000名を超える参加者があった お互いのスタッフ・役員がそれぞれの役割・動き方などで刺激あい、組織の連携強化にもつながった

2 きっかけ

スポレくせとしらうめSCでは、冬季にそれぞれ雪山イベントを行っていましたが、それぞれの会員から「スキー教室があったらいいのに」「スキーは難しいのでもっと簡単に楽しめる教室があれば」などの声が上がってきました。

そこで、総合型地域スポーツクラブ岡山協議会のエリアネットワーク事業として近隣クラブとの連携を支援するという岡山協議会独自の制度を活用し、平成22年に合同で雪山イベントを開催しました。このイベントを契機に、それぞれでソフトバレーボール大会を実施していたことから、合同でソフトバレーボールのリーグ交流戦を開催しています。



3 夏まつりの開催

連携が進む中で、しらうめSCのクラブマネジャーが「現在、スポーツをしていない人にも『しらうめSC』を知ってもらいたいため、スポーツイベントという枠だけにとらわれない、地域の住民全員に楽しんでもらえるイベントはないか」とスポレくせに相談を持ちかけました。そこで、これまでスポーツをしていない人でも楽しんでもらう仕掛けとして、夏まつりを両クラブで連携して協働開催することになりました。

まず、クラブマネジャーなどの事務局だけでは対応しきれない大規模イベントとなるため、両クラブの運営委員で構成する実行委員会を組織しました。実行委員会のメンバーは会議を重ね、起こりうるであろう様々な課題をクリアしていき、大規模イベントを成功に導きました。



4 連携のメリット～共同から協働へ～

両クラブの連携事業からは、3つのメリットがあると考えられます。

- 1クラブで実施するよりも規模の大きな事業が展開できる。
- それぞれが持つ得意分野を活かすことで効率的に運営できる。
- 地域の情報を共有できる。

当初、両クラブの取り組みでは、それぞれが行う既存事業の中で同一・類似する事業を合同で開催するという「共同」の連携でしたが、夏まつり事業のように両クラブで新たに事業展開し、お互いの得意分野を活かした役割を担っていくという、いわば「協働」の連携に発展しているといえます。

その後も、お互いの野球サークル同士の交流試合や、スポレくせの指導者がしらうめSCで新規プログラムとしてダンススクールを開設するなど、新たな活動につながっています。

今後さらなる発展に向けて、それぞれのクラブの得意分野を活かして密に連携していくことが大切であると考えています。

(岡山県クラブアドバイザー 野上 幸恵)

スポーツ・レクリエーション倶楽部くせ

設立年月日：平成15年5月11日

地 域：真庭市久世地域

運 営：会員数…482名(平成25年9月末現在) 予算規模…約1,200万円(平成24年度)

連 絡 先：〒719-3201 真庭市久世266-2 久世体育館内

TEL/FAX:0867-42-5430

E-Mail: sporekuse2003@blue.ocn.ne.jp

しらうめスポーツクラブ

設立年月日：平成19年2月25日

地 域：真庭市落合地域

運 営：会員数…260名(平成25年9月末現在) 予算規模…約900万円(平成24年度)

連 絡 先：〒719-3143真庭市下市瀬586-3白梅総合体育館内

TEL:0867-52-5905 FAX:0867-52-5902

E-Mail: shiraumeclub2007@shiraume-park.jp

[INDEXへ▲](#)

障がいのある人のスポーツを支えるクラブ

NPO 法人新湊カモンスポーツクラブ ～クラブを中心としたバリアフリーの構築～



キーポイント

- 健常者と視覚障がい者が参加できるサウンドテーブルテニス
- 視覚障がい者スポーツ団体にクラブ参加のメリットを伝えて参加してもらう
- 参加者からの要望にもとづき施設をバリアフリー化

1 クラブ概要

「NPO法人新湊カモンスポーツクラブ（以下、クラブ）」（富山県射水市）では、障がい者と健常者の共存社会を目指しています。クラブは、地域住民の誰もが生涯に渡りスポーツに親しむことを目的に、平成11年に行政主導で創設準備を行い、スポーツ団体・学校・経済界を巻き込み、平成16年3月に任意団体として設立しました。

現在は、新湊アイシン軽金属スポーツセンター及び新湊テニスコートを拠点に、幼児から高齢者、障がい者が参加できるスポーツ教室を72教室、カルチャー教室を13教室展開しています。


2 サウンドテーブルテニス教室設置の経緯

クラブでは、健常者と視覚障がい者を対象とした「サウンドテーブルテニス」教室を開催しています。サウンドテーブルテニスとは、一般的な卓球に「転がすと音の出るボールを使う」「弾ませるのではなく、ネットの下を転がす」「その音を聞いて、ラバーの貼っていないラケットで打つ」といった工夫を加えた競技です。



●教室概要

項目	内容	備考
期間	毎週月曜（10：30～15：30）	休館日を除く
対象者	30歳代 1名 40歳代 1名 50歳代 2名 60歳代 4名 70歳代 8名	健常者および視覚障がい者

参加者数及び運営スタッフ	男性 4 名、女性 12 名 運営スタッフ 5 名、指導者 1 名	運営スタッフには事務局員のほか、参加者のご家族も参加されます
収支 (マイナス分は黒字教室で負担とする考え方)	収入	
	年会費	64,000 円
		@4,000 円×16 名 (2 ヶ月割引) (別途保険料)
	支出	
	謝金	52,000 円
	会場使用料	10,000 円
広報	冷暖房費	15,000 円
	クラブパンフレットを新湊地区及び隣接高岡市の一部地域に配布	18,000 部
大会実績 	北信越ブロック視覚障害者サウンドテーブルテニス大会	
	団体の部 優勝 (富山県 A 代表)	平成 25 年度大会
	個人の部 優勝	3 名中 2 名が当クラブ
	全国障害者スポーツ大会サウンドテーブルテニス競技	
	個人の部 2 位	平成 25 年度大会

平成18年9月、クラブは新湊アイシン軽金属スポーツセンター及び新湊テニスコートの指定管理者となりました。それ以前の管理者は、視覚障がい者団体が行うサウンドテーブルテニスの活動を体育館2階の研修室のみに限定していました。クラブでは、視覚障がい者に階段を登らせてまで2階を利用することに疑問を感じ、すぐに1階の研修室へ活動場所を移動しました。

その後、視覚障がい者団体とコミュニケーションを図りながら、クラブに参加することのメリット(参加料免除、指導者への謝金支給、障害者スポーツ協会公認指導員の配置等)を説明し、平成21年4月より健常者5名及び視覚障がい者10名のサウンドテーブルテニス教室を開始しました。

3 教室事業の取り組みとポイント

サウンドテーブルテニス教室は、他の教室よりも開催回数が多く、時間も長く設定しており、参加者が昼食をはさみながら楽しく活動したいとの要望に応えています。健常者の参加者は、「以前は負けることがなかったのに、最近は勝ったり負けたりで障がい者の方々のレベルが上がってきている」とお話しされていました。

教室会場となる研修室のテーブル及び椅子の片付けやパーテーション設置、卓球台や休憩所等の設営は事務局員が対応しています。会員のモチベーションや生きがいをづくりの向上を目指し、年3回大会を開催しています。

サウンドテーブルテニス開始以降、視覚障がいを持つ方からの相談が増えてきました。「卓球台を増やしてほしい」という相談については、市社会福祉課へ要望し、卓球台を購入していただきました。また、「体育館前バス停から玄関内まで点字ブロックシートを設置してほしい」という相談については、指定管理者担当課である市教育委員会生涯学習・スポーツ課で点字ブロックシートを施工していただきました。

さらに「大会を開催したい」という相談については、地域経済会の有志により実現の運びとなりました。「カモン杯」として平成25年の春で3回目を数えています。



4 今後の展望

平成25年度は、国の「地域スポーツとトップスポーツの好循環推進プロジェクト」事業受託の最終年度となり、平成26年度以降についても、積極的に参加したいと考えています。また、平成25年度より射水市元気高齢者支援事業「パワーアップ☆貯きん教室」を受託し事業を展開しています。

総合型クラブは、積極的に幼児から高齢者、障がい者の健康や生きがいづくりに貢献していくべきと考えています。今後も国や県・市・地域とのより強固なネットワークを構築し、新たな事業展開を目指していきたいと思っています。

(クラブマネジャー 酒本 弘充)

クラブプロフィール

設立年月日：平成16年3月

地 域：富山県射水市新湊地域

運 営：会員数 1,300名(平成25年度9月現在) 予算規模 約6,000万円(平成25年度)

特 徴：スペシャル会員という区分があり、年会費にて3つの教室まで参加無料

連 絡 先：富山県射水市久々湊467番地 新湊アイシン軽金属スポーツセンター内
NPO法人新湊カモンスポーツクラブ事務局

TEL/FAX:0766-82-8277

E-Mail: shin-spo@po3.canet.ne.jp

URL: <http://www3.canet.ne.jp/users/shin-spo/>

[INDEXへ▲](#)

障がいのある人のスポーツを支えるクラブ

筆の里スポーツクラブ

～会員みんなが同じ仲間意識で活動できるクラブ～



キーポイント

- 脳梗塞で肢体不自由になられた2名が参加する卓球教室
- 障がいのある方も健常者も同じ環境で活動してもらう
- 障がいのある方が気後れせずにスポーツできる環境づくりが大事

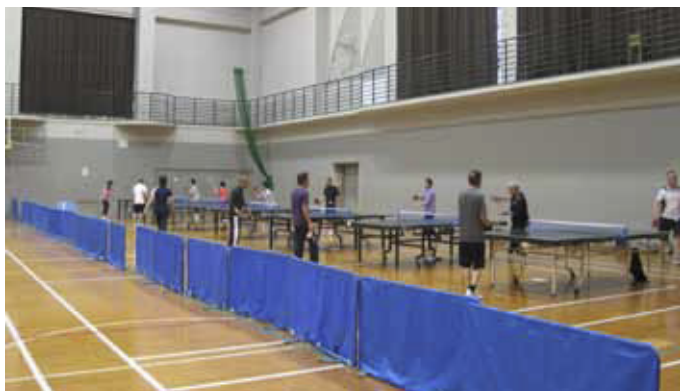
1 クラブ概要

広島県熊野町(人口約25,000人)で活動する「筆の里スポーツクラブ(以下、クラブ)」は、「暮らしの中にスポーツを!心と体をリフレッシュ!」を理念に平成7年6月に設立されました。設立時は11種目11教室でしたが、会員のニーズを把握することで年々実施する種目を増やし、現在は26種目52教室となっています。

そのなかで今回は、「障がいのある人のスポーツを支える」をテーマに、数年前に脳梗塞で肢体不自由になられた2名が参加されている「卓球教室」取材しました。

2 きっかけ

卓球教室は毎週土曜日15時～17時に行われ、全体では32名の方が参加しています。お二人は脳梗塞になられてからクラブの体力アップ教室に参加しており、その教室が終わった後に通りかかったとき、とても良い雰囲気卓球をしていたのをご覧になったそうです。また、競技志向というより「みんなで楽しく」活動していることを口コミで聞き、それをきっかけに参加するようになったということです。



3 障がいのある方を特別扱いしない

実際に教室見学した際に感じたのが、指導者、参加者の皆さんが障がいのある人を特別視するのではなく、一緒に卓球を楽しんでいたことでした。例えば、他の方たちが試合形式で練習しているときは健常者の方とラリーが何回続くかを競い合う、障がいのある方がミスしたときにボールは健常者の方と同様に自分で取りに行く、健常者の方もあえて取りにいかずに待つなど、参加されている方全員が特別視せず、会員みんなが同じ仲間であるという目的のもとで活動されていました。

お二人も、
「以前は違うところでスポーツをやっていたが、最初は楽しくてもやがて競技志向が強くなり嫌になった。この教室は通い始めて3年になるが、教室の趣旨がぶれていないので楽しい」
「体力アップ教室に通っていて、もう少し運動したいと思いクラブに相談したところ、卓球教室を紹介され通うようになった。まだまだ思ったように動かないが、数か月前より半歩前に出て打てるようになった。家に1人でいると気持ちが沈んでしまいがちになるが、外に出てスポーツで汗を流して、色んな人と話すことで気分転換になる」
とおっしゃっていました。
また、以前「卓球教室」に参加されていた肢体不自由だった方が、体力の回復に合わせて職場復帰を果たされるなど、効果も現れてきています。



4 いかに全員が楽しめるかが大事

クラブでは、障がいのある人が総合型クラブで安心してスポーツを楽しむために、各教室の指導者には資格の有無ではなく、仲間づくりをサポートし、みんなで楽しく健康づくりに取り組める環境を作ることができる能力を重視しています。

また、クラブマネジャーが時々教室に顔を出して教室の雰囲気をつかみ、少しでもおかしいと感じた時は指導者と話し合うことで、参加している全員がスポーツを楽しめるように修正する等の連携が取られていました。

クラブマネジャーの大野さんからは「障がい者の方はどうしても健常者の方に対して気後れしてしまいやすいので、指導者がその部分に十分に配慮し、継続してクラブに通っていただけるように留意している」とお話しいただきました。

「遍く人々が差別なくスポーツの恩恵に浴する」ために、地域での総合型クラブの力が今後ますます必要になってくると感じました。

(広島県クラブアドバイザー 茂川 真二)

クラブプロフィール

設立年月日：平成7年6月

地 域：広島県安芸郡熊野町

運 営：会員数…1,027名(平成25年7月現在) 予算規模…約740万円(平成25年度)

連 絡 先：〒731-4223 広島県安芸郡熊野町川角5丁目10-1

TEL:082-854-7695

FAX:082-854-9622

E-Mail: <http://www17.plala.or.jp/kumanokss/club.html>

障がいのある人のスポーツを支えるクラブ

高知チャレンジドクラブ ～障がい者スポーツを核としたクラブ～



キーポイント

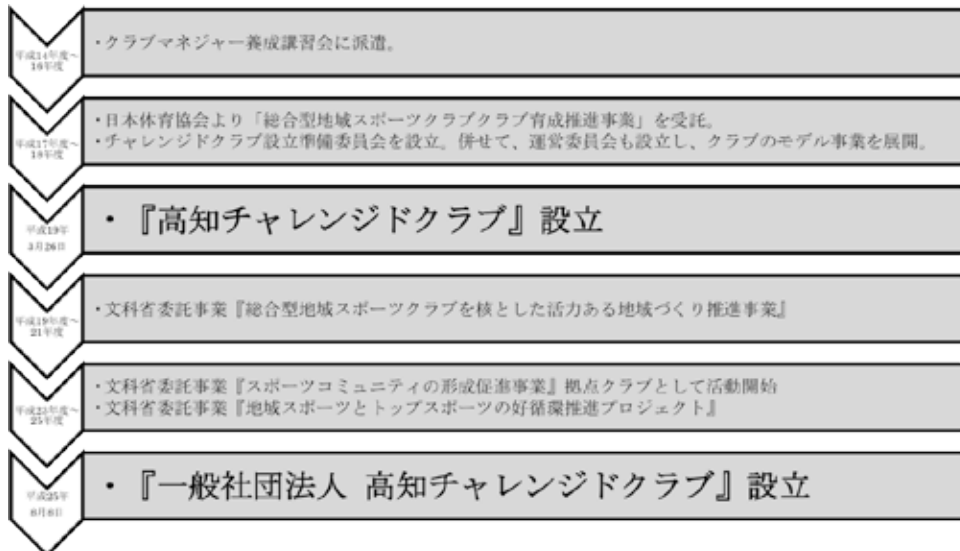
- 障がい者スポーツを核としたイベント「ユニバーサルフェスティバル」
- 他クラブを巻き込み障がい者スポーツの底辺拡大を目指す
- 姉妹クラブと協力して県内全域に障がい者スポーツを広めていく

1 クラブ概要

「高知チャレンジドクラブ(以下、クラブ)」(高知県高知市)は、国のスポーツ振興基本計画を受けて高知県が策定した「とさのスポーツプラン」の流れを受けて、平成19年3月26日に誕生しました。

設立当初は会員数125名、12事業(6教室、4サークル、2イベント)でしたが、現在では会員数305名、26事業(9教室、8サークル、9イベント)を展開しています。

<クラブ設立までの流れ>



<クラブの3つの理念>

障害／生涯スポーツを地域で

障害のある人が自分たちの暮らしている地域で、生涯スポーツを楽しめるように、障害／生涯スポーツを盛り上げていきます。

障害者と健常者の交流活動

様々なサークル・イベントを通して、地域の人々が交流を行い、たくさんのお出合い、そしてたくさん笑顔が見られるようにユニバーサルな街づくりを目指します。

感性豊かな心を育む

高知の雄大な大自然の中での活動や、サークル・イベントを通して、自分の可能性に挑戦する楽しさを実感し、感性豊かな心を育みます。

2 きっかけ

障がい者スポーツを主な事業としたクラブを創るようになったきっかけは、高知県全域で障がい者スポーツを振興する体制を作ることを目指していたことです。「とさのスポーツプラン」の中には、障がい者スポーツの振興についての記載があり、総合型クラブの設立を進めることで、その目標の達成につながると考えました。

設立に向けての動きを進めるとともに、モデル事業を展開して実際に運営することも同時進行で行い、障がい者スポーツという観点で厚生労働省、総合型クラブという観点で文部科学省とそれぞれ関わりを持つなど、様々な方面の人や団体とネットワークを築くことができました。その結果、会員数305名の内、120名（約4割）が障がい者という県内でも特色あるクラブに成長しました。障がい者の会員は身体・知的・精神の3障害全てにわたっており、障がいの重さを表す等級についても身体障がいという最重度の1級から軽度の人まで様々です。

3 他クラブと連携したユニバーサルフェスティバル

障がい者スポーツを支える環境を県内全域で作るためには、他クラブとの連携が必要になります。そのネットワーク構築に向けて、平成20年度から「ユニバーサルフェスティバル」というスポーツ普及イベントを県西部・東部地域で開催しています。

イベントでは、各地域のクラブに共催団体として企画・運営にご参加いただくほか、各クラブで行っているスポーツや各地域の特産物などを持ち寄り、スポーツ体験コーナーや出店コーナーなどで扱うことで、各クラブや地域の情報発信の場としても活用されています。障がい者スポーツを核とし、多くのクラブと合同で1つのイベントを開催するという事例は全国を見てもあまりないのではないのでしょうか。

他クラブと協力する中で、障がい者スポーツについて情報発信をすれば、新たに障がいのある人のスポーツを支えるクラブが増えるかもしれません。その意味でこのイベントは障がい者スポーツの底辺の拡大において重要な役割があるといえます。

以下に、去年行ったユニバーサルフェスティバル2012in西部について紹介します。

日時	平成 24 年 12 月 23 日 10:00 ～
場所	土佐西南大規模公園体育館・陸上競技場等（幡多郡黒潮町入野 338）
主催	高知チャレンジクラブ・ユニバーサル四万十
共催	スポレクすくも（宿毛市）、スポーツクラブスクラム（土佐清水市）、レッツ大月（大月町）、大正スポーツクラブ（大正町）、くぼかわスポーツクラブ（四万十町） 高知県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会
後援	黒潮町教育委員会、黒潮町社会福祉協議会、四万十市社会福祉協議会、高知新聞社、RKC 高知放送、KUTV テレビ高知、KSS さんさんテレビ
協力	高知県立障害者スポーツセンター、高知県障害者スポーツ指導者協議会
内容	★オープニングイベント ・和太鼓の演奏 ・義足のアスリート 藤嶋大輔選手のデモンストレーション ・ミニイベント（カップラーメン積み競争、大声選手権、抽選会） ・レクリエーション ★スポーツ体験・交流大会コーナー ・駅伝交流大会 ・ディスクゴルフ交流大会 ・各種スポーツ体験 トランポリン、ビームライフル、ハンドサイクルと自転車、車椅子タイムアタック、ストレッチ体操、スリッパ飛ばし、わなげ、ポッチャ、スロービーなど

今後は、姉妹クラブである「ユニバーサル四万十」と協力しながら、東部の地域でも姉妹クラブの設立を考えており、県内全域で障がいのある人もない人も一緒にスポーツを楽しむことのできる環境づくりを目指していきます。

障がいのある人のスポーツを支えるためには様々な人々や団体の協力が必要になります。そのようなネットワークを築くためにこちらから行動するということが重要ではないかと思います。

（アシスタントマネジャー 正岡 直也）

クラブプロフィール

設立年月日：平成19年3月26日

地 域：高知県高知市春野町地域

運 営：会員数305名(平成25年4月1日現在)

特 徴：障がいのある人もない人も共に支えあいながら活動しているクラブ

連 絡 先：事務局 〒780-0072 高知県高知市杉井流16-5セフティビル4階A

TEL:088-855-7716 FAX:088-855-7718

事業部 〒781-0313 高知県高知市春野町内ノ谷1-1 高知県立障害者スポーツセンター内

TEL:088-841-0021 FAX:088-841-0065

URL: <http://www.challe-univ.org/>

[INDEXへ▲](#)

クラブのPRがユニークなクラブ

自治会のネットワークを活かしたクラブPR ～花館グリーンウインズスポーツクラブ～



ココに注目!

- ① 地域自治会のネットワークを活用!
- ② 子ども会や老人クラブと連携、認知度アップ!
- ③ 「地域の活性化」と「絆づくり」のために!

1 地域自治会のネットワークを活用!

クラブでは、運営委員に地域の自治会長が全員入っています。そのため、地域の自治会が全面的にクラブの活動趣旨に賛同し、協力してくれています。そのため、自治会を通じたクラブPRも可能で、例えば一人暮らしの高齢者にもクラブ情報が届きます。自治会によっては、ゴミ集積ボックスにクラブ用の専用掲示板を用意してくれています。掲示板には、スポーツ教室開催情報等の掲示をしてもらっています。

そして何よりも、クラブPRチラシを自治会長自らが各世帯に配ってまわってくださり、その口コミにより、一人暮らしを含む高齢者の加入者が増えてきているのがクラブとしてはうれしいようです。

2 子ども会や老人クラブと連携、認知度アップ!

■きっかけ

地域の各自治会には、子ども会や老人クラブが組織されていますが、それらの活動はマンネリ化しており、また子ども会は少子化の影響も受け、組織単独での活動が難しくなっていました。地域の絆も薄まってきており、「地域の子どもの顔がわからない」という地域の方々の声も聞こえていました。

そこで、地域の活性化や絆づくりを目的に、クラブが交流事業を実施することにしました。

■内容

クラブ主催の交流会に、老人クラブの会員や子ども会の会員（親子）を招待し、世代間で楽しめるスポーツ交流会や餅つき交流会を開催しています。

スポーツ種目は、グラウンドゴルフやスポーツ吹き矢等を行っています。汗を流した後は、芋煮を食べたり、餅つきをしながら交流を図りました。

■成果・評価

老人クラブや子ども会の組織単独では実施できない交流をスポーツクラブが行うことで、地域への認知度がグッと高まりました。

今年度（平成25年度）から、老人クラブの会員や子ども会の会員からも交流会への参加費をいただくことにしたが、参加人数は減ることはなく、逆にファミリー会員としてスポーツクラブへ加入するケースも見られるようになってきました。



3 「地域の活性化」と「絆づくり」のために！

クラブの理念には、「子どもから高齢者まで、広く地域住民の生活向上に寄与するため、スポーツ、文化を通して地域住民の心身の健康と保持増進を図るとともに、様々な人との交流を広げ、地域の活性化と元気な明るいスポーツライフを送るための環境の実現を目指す」とあります。クラブではこの理念にもとづき、「地域の活性化」と「絆づくり」に貢献できるクラブとして、今後もクラブPR活動を行っていきます。

(クラブマネジャー 沢屋 隆世)

クラブプロフィール

設立年月日：平成25年2月

地 域：秋田県大仙市花館地域 上下大戸・中野・唐関地区

運 営：会員106名(平成25年10月現在)

予算規模37万円(平成25年度)

特 徴：地域の自治会を中心にクラブを設立。地域の活性化と絆づくりを担っている。

連 絡 先：秋田県大仙市花館字上大戸下川原74-45 玉川荘内

TEL：090-1064-7184(沢屋) FAX：0187-63-6184

E-mail：sawaya@trust.ocn.ne.jp

[INDEXへ▲](#)

クラブのPRがユニークなクラブ

「愛称」「ロゴ」「イメージキャラクター」によるPR活動 ～ 南部町総合型地域スポーツクラブ「スポnetなんぶ」～



ココに注目！

- ① クラブの「愛称」「ロゴ」「イメージキャラクター」を作成！
- ② 他団体のイベントに積極的に参加！
- ③ 地域の方を対象にコンサートを開催！

1 クラブの「愛称」「ロゴ」「イメージキャラクター」を作成！

<きっかけ>

クラブは平成24年11月に設立し、今年度（平成25年度）より会員募集を開始したばかりであり、まず、地域にクラブの存在を知ってもらうことが重要であると考えていました。そこで、地域の方が一目見てクラブのことが思い浮かぶようなインパクトのある「ロゴ」と「イメージキャラクター」を作成しました。

- 愛称：「スポnetなんぶ」（クラブ設立後に、愛称を地域の方から募集しました）
- ロゴ：（愛称に「元気」と「スポーツ」をイメージしたデザインにしています）
- イメージキャラクター：「ポネットちゃん」（スポーツを連想させる「金メダル」や「輝き」をイメージさせる「星」を身につけています）



2 他団体のイベントに積極的に参加！

今年度は、町内の他団体が行うイベントからブース設置の依頼を受けて、「スポnetカフェ」と称してブースを設置しました。約25席のくつろぎのスペースを作り、コーヒー、紅茶等の飲み物とクッキーを添えて販売しました。



3 地域の方を対象にコンサートを開催！

さらなるクラブの認知度向上に向けて、スポーツ教室・イベント活動に限らず、より多くの地域の方々に参加できるイベントとして、「クリスマスキャンドルコンサート」を開催し、町内在住のシンガーソングライターによるコンサートや町内のお店による出前カフェを行いました。

当日は定員の100名を超える参加があり、小さな子どもから大人まで多世代にわたって楽しめる和やかな雰囲気での交流の場となるコンサートとして成功したと感じています。



<今後の展望>

今後は、「ポネットちゃん」の着ぐるみを作成し、クラブ主催の事業に限らず、町内のイベント等に積極的に参加していこうと考えています。

クラブプロフィール

設立年月日：平成24年11月4日

地 域：鳥取県西伯郡南部町地域

運 営：会員数141名（平成25年11月現在）

予算規模330万（平成25年度）

特 徴：自然体験イベント、大なわとび大会等多くの世代に楽しむことができる様々なイベントを実施

連 絡 先：鳥取県西伯郡南部町天萬558 南部町教育委員会事務局内

TEL：0859-64-3780 FAX：0859-64-2183

E-mail：sports@town.nanbu.tottori.jp

クラブHP：<http://www.suponetnanbu.jp>

[INDEXへ▲](#)

クラブのPRがユニークなクラブ

「地域との連携によりクラブをPR」

～ 出水南どっとネット ～



ココに注目！

- ① クラブのオリジナルグッズで「ゆるキャラ」とコラボ！
- ② 他団体と関係構築、PRの場を得る！
- ③ ブログ・ホームページ・SNSの連動で多方面に情報発信！

1 クラブのオリジナルグッズで「ゆるキャラ」とコラボ！

クラブでは、クラブがどのような趣旨や目的で活動しているかをスポーツにあまり興味・関心がない方に対しても理解してもらうため、**クラブのオリジナルグッズを作成・販売**しています。

●オリジナルグッズ

マフラータオル・買い物バッグ・マグネット・ミニタオル・クリアファイル・ボールペン



2 他団体と関係構築、PRの場を得る！

■きっかけ

クラブ設立当初から、クラブの知名度を上げることを優先的に考えていました。知名度を上げるため、地区の小学校区の自治協議会にも加入し、他の団体等とも関係構築に努めています。

■具体的な活動内容

- 小学校PTA主催のバザーの際、バザーの商品を購入した方に**クラブPRコーナーのクジ引き券**を渡し、クラブPRコーナーへ来てもらいPR活動
- 小学校区の体育祭で、**参加賞としてクラブオリジナルグッズ（ポケットティッシュ）**を配付
- 町内の子ども会が行うクリスマス会等のイベント時にゲーム等を実施

■成果

数年にわたり活動した結果、主催者側から「今年もやりませんか?」という声をかけてもらえるようになりました。

3 ブログ・ホームページ・SNSの連動で多方面に情報発信！

クラブでは、ブログ・HP・SNSを活用しクラブの紹介だけでなく、地域他団体の活動状況も掲載しています。

■活動事例

- HPにクラブの協賛企業となっていていただいているお店の紹介やイベント・セール情報等を掲載し、クラブの協賛企業とのwin-winの関係を築くようにしています。

- ブログでは日々の活動内容を紹介し、**Twitter等のSNSとも連動させて**、色々な媒体からでもクラブの活動が分かるようにしています。
- 紙媒体の広報紙等においても、ブログにて情報発信している旨を掲載しています。

■成果

クラブでは、特に**ブログを頻繁に更新することが重要である**と考えており、日々更新することでブログを見たという若年層や他地域からの問合せも増えてきているそうです。

(熊本県クラブアドバイザー 永田 好文)



クラブプロフィール

設立年月日：平成20年7月

地域：熊本市中央区出水

運営：会員数100名(平成25年7月現在)

予算規模160万円

特徴：1小学校内で子どもからご年配までの誰もが参加でき楽しめるクラブ

連絡先：熊本市中央区出水4丁目10-22

TEL：096-323-7323 FAX：096-371-1466

E-mail：info@izumiminami.net

クラブHP：<http://www.izumiminami.net>

[INDEXへ▲](#)

若い世代がクラブ運営に参画しているクラブ

30歳代の男性スタッフが多いクラブ…情熱からの繋がり ～とうまスポーツクラブ～



ココに注目!

- ① キーパーソン（岡本大志さんと上野和香子さん）
- ② 30代の男性スタッフが多い理由
- ③ 元気が伝わるクラブ創り

1 キーパーソン（岡本委員長と上野事務局長）

■クラブづくりのきっかけ

とうまスポーツクラブの設立には、2人のキーパーソン（岡本大志委員長と上野和香子事務局長）がいます。事務局長である上野和香子さんは地域の柔道スポーツ少年団の指導者であり、オリンピックメダリストの母でもあります。岡本大志さんは、上野さんに柔道スポーツ少年団の練習に誘われたことがきっかけで柔道スポーツ少年団の指導者として活動しています。

5年程前、上野さんが総合型クラブのことを知り、当麻町でのクラブづくりを目指した際、岡本さんは上野さんの熱意を受けてともにクラブづくりに関わりました。

2 30代男性の運営スタッフが多い理由

■なぜ若い運営スタッフが多いのか？

設立準備委員会を立ち上げる段階で、上野事務局長以外の方々がほとんど30代でした。これは、ひとえに上野事務局長の人柄によるものだと思います。設立準備委員会が立ち上がった後、設立に向けて設立準備委員の口コミで新たに参加者を募ったところ、運営委員（スタッフ）の多くが30～40代となりました。

■世代交代について

現在、クラブには30～40歳代と比較的若い世代が多いのですが、10～20年の期間でスタッフの入れ替えを図っていかなければいけないと考えています。経験を積ませるためにも早い段階でのスタッフの入れ替えも必要です。

■次世代につなぐ

100年つづくクラブを目指すためには、経験豊かな世代から、新しい考えを持つ世代まで様々な意見が必要です。今のスタッフにこれから様々な方々を加え活動していきます。次の世代の夢をつなぐために、自分たちが夢をつないでいきます。

3 元気が伝わるクラブ創りに

クラブづくりに必要なものは、スタッフの熱意だと思います。スタッフそれぞれがクラブの理念を忘れることなく、それに向かう熱い気持ちを持っていれば、必ず人はついてきます。

最後に、このクラブには「楽しいからやろう!」と言い合う雰囲気常在にあります。会議でも一人一人の話を真剣に聞き、前向きに取り組む姿があるクラブです。地域のため、住民のためにたくさんの正しい汗をかいているクラブ!こんなクラブが増えるといいですね。

■クラブの今後

クラブライフの充実を図るために継続活動を増やし、さらに会員数を増やしたいと思います。また、スポーツ活

動の推進にあたる様々な関係機関と連携を深め、地域に根差したクラブ運営を目指していきたいです。現在、NPO 法人化に向け動き出しており、さらなる飛躍に向け準備が始まっています。



(北海道クラブアドバイザー 久保田 智)

クラブプロフィール

設立年月日：平成 25 年 3 月 6 日

地 域：北海道当麻町

運 営：会員数 90 人

予算規模 1,800,000 円 (平成 25 年度)

特 徴：小規模ではあるが、地域の方誰もが楽しく参加できるスポーツクラブ。

連 絡 先：とうまスポーツクラブ 理事長 岡本大志

TEL：0166-84-2189 FAX：0166-84-2189

E-mail：tohma.sc2013@gmail.com

クラブ HP：<http://tohma-sc.main.jp/>

[INDEXへ▲](#)

若い世代がクラブ運営に参画しているクラブ

若い力で地域のスポーツ環境を変える!

～ NPO 法人ウィル大口スポーツクラブ ～



ココに注目!

- ① 事務局長の古田政一さん
- ② 20 ～ 30 歳代のスタッフで運営!
- ③ 10 年後のクラブビジョンとは?

1 事務局長の古田政一さん

NPO 法人ウィル大口スポーツクラブの事務局長である古田政一さんは、20 歳代の頃、自身が社会人サッカー選手として活動する中で、自身の地域には子どもたちがスポーツする環境が整っていないことから、平成9年にサッカークラブを立ち上げ約 200 名の子どもたちを指導していました。

やがて地域で熱心に子どもたちを教えている姿が、行政の目に留まり総合型クラブ設立に向けた相談を受けたことをきっかけに平成 14 年にクラブを設立しました。活動当初から行政依存ではなく、民間の力で運営するという方針がクラブ側と行政側との間で共有されており、地域のプールやグラウンドの指定管理を受けながら、補助金や助成金などを受けずに運営しています。

2 20 ～ 30 歳代のスタッフで運営!

クラブの特徴的な部分としては、21 名いるクラブスタッフ（有給）全員が 20 ～ 30 歳代の若い世代である点です。彼らの多くは古田さんの後輩や教え子たちです。地域のクラブで育った子どもたちがやがてクラブの指導者として帰ってくるという形が出来上がっています。

一方で、若者が「仕事」として総合型クラブで雇用するということは、容易なことではなく、スタッフの入れ替わりが多い現状があるそうです。古田さんは、「クラブで働く（雇用する）」ということ、若者にとってより魅力的にしていけることが今後の課題の 1 つであると語っています。

3 10 年後のクラブビジョンとは?

平成 14 年にクラブが設立されて約 10 年間。この 10 年間を振り返ると、設立当初、地域には子どもたちがスポーツできる環境がほとんど整備されておらず、スポーツをしたい子どもは近隣市町へ出向いていくしかありませんでした。それが、クラブが中心となって地域の子どものためにスポーツする機会を提供し続けた結果、多くの子どもたちが地域でスポーツする姿を見ることができます。また、地域の小・中学校の運動部活動では、クラブで育った子どもたちの活躍で県大会や地区ブロック大会へ進出する部活動も出てきており、スポーツの「普及」という観点では、一定の成果があったと古田さんは感じています。

今後の 10 年間に向けては、より良いスポーツ環境の整備と優秀なスポーツ選手の輩出、そして高齢者向けの事業の充実を図っていききたいと語っていました。

設立年月日：平成14年4月（平成15年5月NPO法人格取得）

地 域：愛知県丹羽郡大口町

運 営：会員数 2,300名（平成25年度）

予算規模 2億円（平成25年度）

特 徴：子どもを対象とした種目を中心に、若い世代のスタッフが活躍しているクラブ

連 絡 先：NPO法人ウィル大口スポーツクラブ事務局

TEL・FAX：0587-95-1313

E-mail：

クラブHP：<http://www.will-oguchi.com/>

[INDEXへ▲](#)

若い世代がクラブ運営に参画しているクラブ

「将来を見越して若い世代がクラブ運営を担っていく」 ～ NPO 法人クラブおおづ ～



ココに注目!

- ① クラブマネジャーの斎藤陽子さん
- ② 世代交代を図り、若い世代でクラブ運営!
- ③ 「地域コミュニティ」=「町のチカラ」

1 クラブマネジャーの斎藤陽子さん

「NPO 法人クラブおおづ」のクラブマネジャーである斎藤陽子さんが、総合型クラブに関わりを持ったのは、自身の地元である大津町で平成 15 年に総合型クラブが設立されたことがきっかけです。斎藤さんは、小学生の頃から町の体育協会が主催する水泳教室に通い、将来はスポーツ指導者として、特に高齢者の健康づくりに取り組みたいと考えていたとき、「総合型クラブ」が果たすことのできる役割（地域コミュニティづくりの機能など）に関心を抱き、クラブに関わりました。

当初は、ボランティアスタッフとしてクラブに関わっていましたが、自身のスキル向上を目指し、民間フィットネスクラブでの勤務などを経て、平成 23 年に常勤のクラブマネジャーとして働き始めました。

2 若い世代をクラブに巻き込む!

クラブは設立当初、60 歳代の方々が中心となり運営されていましたが、斎藤さんは年々変化していく地域の状況を踏まえると、若い世代がクラブ運営に関わる必要性を感じていました。そこで、クラブで活動している子どもたちの保護者に対して、声掛けを実施し、現在では、30 ～ 40 歳代の方々がクラブ運営に関わってきています。一方で、これまで中心に活動されてきた 60 歳代の方々には、若い世代では持っていない地域の他団体とのネットワークを持っていることから、まだまだ頑張ってもらっています。斎藤さんは若い世代とベテラン世代の調整役として奮闘しています。

3 「地域コミュニティ」=「町のチカラ」

斎藤さんに総合型クラブで働くやりがいについて伺ったところ「クラブおおづの活動から生まれる地域コミュニティには、無限の可能性があると思う。そこにクラブの魅力を感じている」と答えました。総合型クラブは、スポーツを通じて、地域で人と人をつなぐことができたり、地域の問題・課題の解決に貢献できる、そういった可能性を信じているからこそクラブで頑張れるということでした。

また、クラブおおづでは新しい世代の発掘にも取り組んでおり、今年（平成 26 年）の 4 月からは、クラブで育った人材をクラブの職員として雇用することになりました。斎藤さんは、「将来、地域の子供達達が『クラブおおづのマネジャーになりたい』と夢を抱いてくれるような活動を展開していきたい」と語っていました。



設立年月日：平成15年4月27日（平成20年9月1日NPO法人格取得）

地 域：熊本県菊池郡大津町

運 営：会員数 464名

予算規模 約1,000万円（平成24年度）

特 徴：子どもたちにスポーツの機会提供を目的に設立され、現在では多世代にわたりスポーツ活動を提供している。

連 絡 先：NPO法人クラブおおづ事務局

TEL・FAX：096-294-2922

E-mail：clubozu150427@yahoo.co.jp

クラブHP：<http://clubozu.com/concept.html>

[INDEXへ▲](#)

1 「オリンピック・パラリンピック」の魅力と 1964年東京オリンピックの思い出

昨年(2013年)に2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定しました。この出来事は、日本中に大きな感動と喜びを与えると同時に、「2020年に向けて日本のスポーツ界はどうあるべきか」という問いがスポーツ関係者に与えられたといえるでしょう。その問いの1つとして、「総合型クラブをはじめとする地域スポーツはオリンピック・パラリンピックとどのように関わることができるのか」ということも挙げられます。そこで今回、2020年東京オリンピック・パラリンピックと総合型クラブとの関係性について、識者の方々にお話を伺いました。

対談者

師岡 文男 氏 [上智大学文学部教授(保健体育研究室長)]

菊地 正 氏 [NPO法人高津総合スポーツクラブSELF 副理事長]



菊地
正



師岡
文男

「オリンピック・パラリンピック」の
魅力とは

師岡(敬称略) オリンピックの一番大きな魅力は、200を超える国と地域の人々が同じ場所に一堂に会し、その様子を世界中の人々がリアルタイムで見ているイベントであるという点です。これは国連総会でも成し得ていないことです。オリンピックでは、これまで名前も聞いたことがないような国も参加しています。「世界にはこれだけ多くの国や地域があるのだ」ということを多くの人が実感でき、特に開会式では一つ一つの国に平等にスポットライトが当たる唯一無二な世界一のイベントである点がオリンピックの最高の魅力といえるでしょう。

2つ目の魅力は、世界中の人々がスポーツを通して、感動や喜びを共通体験するという点です。スポーツには「見る」「支える」といった様々な形で関わることで、世界中の人々が競技者としてだけでなく、観戦する人、支援する人など多様な形で自分の生活に関連付けながらオリンピックを味わうことができます。

さらに、パラリンピックについて言えば、「パラリンピック」という言葉は、実は1964年の東京大会の際、日本人が考えたものです。『オリンピック憲章』にはオリンピックの根本原則として、「スポーツを行うことは人権の一つである。すべての個人はいかなる種類の差別も



なく、オリンピック精神によりスポーツを行う権利を与えられなければならないはず、それには、友情、連帯そしてフェアプレーの精神に基づく相互理解が求められる」と書かれています。オリンピックの実現の意味でも、パラリンピックはオリンピックとセットで開催されることに意味があるのです。障がい者スポーツの現状に目を向ければ、まだまだその環境が整備されていない状況です。今回、56年ぶりにパラリンピックが開催されることで、多くの方々に障がい者スポーツに関心を持っていただけるきっかけになることは3つ目の大きな魅力だと思います。

1964年東京オリンピックの思い出

菊地(敬称略) 1964年当時私は

中学1年生でした。50年が経過した今でも当時の感動は鮮明に覚えていまして、人生の中でも一番と言っているほど感動したイベントでした。私は小学生のときからアイスホッケーをしており、東京オリンピックを見て、「いつかは自分もオリンピックに」と思いながら活動していました。結局、オリンピック出場はかきませんでしたが、北海道の仲間がオリンピックに出場するなど「オリンピック」というものになりしました。2020年のオリンピックでは、1964年当時自分が感動したように、今の子ども達にその感動を味わわせてあげたいですね。

また、私はスポーツする上では「勝ち負け」の面白さ、美しさも重要であると思っています。スポーツが本源的に持つ「楽しさ」には「勝ち負け」による楽しさということも含まれていると思います。オリンピックでは、日本人が勝つ姿にぜひ感動していただきたいです。勝利に向けて全力を尽くすことの良さも味わってほしいです。

師岡 私は当時小学5年生、10歳でした。4つの思い出があります。

1つ目は、1964年は観光目的のパスポートの発行が始まった「第二の開国」といえる年だったということですね。外国への関心が一気に高まり、東京オリンピックに参加する94の国名と国旗を覚え、わくわくしながら開会式

で一つ一つ確認したことを覚えています。

2つ目は、日本が豊かになっていくことを実感したことです。オリンピックの開催に向けて、例えば、給食の脱脂粉乳が牛乳になったり、東海道新幹線や首都高速道路が開通したり、ホテルが次々と建設されたりと、劇的に日本が変わっていく様子が見えた年でした。また、外で立小便をしないなど国際的なマナーを身につけたのも、オリンピックがきっかけで、国際標準でものを考えるようになったからだといえます。

3つ目は、世界中の選手が混然一体となり入場してきた閉会式です。戦後19年、まだ戦争に負けた悲哀の影を残す当時において、日本人の旗手を外国の選手達が担いで行進していくのをテレビで見たとき、「日本が世界に認められた」感激で涙が止まりませんでした。

4つ目は、ホッケーの試合を生で観戦したこと。私は世田谷区に住んでいたこともあり、駒沢オリンピック公園で行われた、観客数が少ないホッケーの観戦に動員されました。そのときに世界トップレベルの試合を間近に見て、そのプレーの素晴らしさに驚きました。当時の日本は、ほとんど「スポーツ」野球」という時代で、サッカーですら観客席が埋まらなかったのです。世界には「多種多様なスポーツがあること」を実感したことを覚えています。



菊地 私は、オリンピック期間中に、地域の小中学生で国立競技場に国旗を掲揚しに行く手伝いをしたり、開会式の様子を見せてもらったりしました。また、自宅近くの甲州街道で男子マラソンをやっていたときにアベベ選手が走っている姿を見て、その人間離れした速さには驚きました。

師岡 当時は甲州街道もので、沿道を埋めた方々の中にはゴザを敷いたり、割烹着姿の女性も多く見受けられました。当時はまだそのような時代でした。

菊地 それからオリンピックを契機に街並みが劇的に変化していくのを見て、子どもながらに「これからどれだけ発展していくのだろう」とワクワクしていました。

2020年東京オリンピック・パラリンピック 開催決定が持つ意味

スポーツ界にとっての2020年 東京オリンピック・パラリンピック

師岡 スポーツ界にとって、今回の開催決定には5つの意味があると考えています。

1つ目は、「オリンピック」や「スポーツ」に対する関心が飛躍的に向上したことです。これまで「スポーツ振興は重要だ」と言われながらも、国や都道府県のスポーツ関連予算が削減されたりすることがありましたが、開催決定により、スポーツ関連予算が大幅に増額されました。また、一般の方々も毎日のようにオリンピックを話題にするようになり、これまでスポーツに関心がなかった人達も関心を持つようになりました。

2つ目は、国民共通の目標と夢が生まれたということです。将来に対する明るい未来像を描いたり、共通の目標を持つたりすることが難しかった昨今において、「6年後までにはこうありたい」という共通の目標や夢を持つことができるようになりました。

3つ目は、スポーツ庁の設置に弾みがついたことです。これまでタテ割りに分散化されていたスポーツ行政が一元化・効率化するだけでなく、「庁」になることで予算の増額が期待できることは大きいと思います。

4つ目は、「スポーツ・フォア・オール」が推進されることです。『オリンピック憲章』には、「スポーツ・フォア・オー

ルの発展を奨励・支援すること」が、「IOCの使命と役割」であると書かれています。オリンピック開催を引き受けたことで、IOC(国際オリンピック委員会)からは、「単に競技者のためのオリンピック競技大会を開催するだけではなく、オリンピックの開催を通してすべての人々が生涯スポーツを楽しめる環境を提供できる成熟社会の姿を世界に発信してほしい」と期待されているはずで、オリンピック・パラリンピック開催決定を契機に、障がい者スポーツも含めた「スポーツ・フォア・オール」社会を実現することが推進され、多種多様なスポーツ種目があることも知ってもらったチャンスでもあります。

5つ目は、「国際化」です。いまだにIF(国際競技連盟)の理事を務める日本人は多くありません。今回東京が開催地に決定したことで、各競技の日本協会が否応なくIFとの連携強化が必要になっていきます。日本のスポーツ組織を国際化させていく契機の到来です。この機会を「第3の開国」にしていくことが求められています。

この5つが日本のスポーツ界にとって、オリンピック・パラリンピック開催決定がもたらした意味だと思います。

クラブにとっての2020年 東京オリンピック・パラリンピック

菊地 クラブにとっては、「6年後」とい

う中期的な活動目標ができたと思います。個々のクラブにおいては、「自分のクラブで活動する子ども達がオリンピックに出られるかもしれない」と思って、2020年を1つの目標として活動するでしょう。また、SC全国ネットワークのようなクラブの全国組織においても、全国のクラブで共有できる目標の1つとなり得るでしょう。1クラブの取り組みだけでは、オリンピックに関わるのが難しい事柄でも、約3400クラブが力を結集すれば実現できることがあるかもしれません。いずれにしても、皆で集まって「自分達のできることを考えるきっかけになったと思います」。

加えて、「次世代の人材育成」と「世代交代」を促すきっかけになると思います。私のようなクラブ創設期に関わった者もいつかは運営主体を次世代に譲るタイミングが来ます。クラブが若者の就職先となるには、まだまだ課題は多いですが、オリンピックの大きな流れを活かして、オリンピック後に、若者達が「仕事」としてクラブに携わるようになれば良いですね。そのためには、クラブの自立・自律や認知度向上に向けた取り組みが必要になってくると思います。

師岡 「世代交代」は、まさにオリンピック・パラリンピックが来ることで促されると思います。昨年(2013年)ある区役所で講演と自由討論を行った際、7年後まで区役所で働いている方が参加

条件になっていました。2020年を意識すると自然と世代交代が促されていくものなのだと思います。

オリンピックが日本スポーツのあり方・価値観を変える

菊地 師岡先生のお話にありましたスポーツ庁の設置は、クラブにとっても大変大きな意味があると思います。現状では、クラブがトップアスリートを育てて学校現場に派遣するという役割まで担うことは難しいです。しかし、その役割を担うことがクラブの使命であるとも考えています。スポーツ庁設置の流れの中で、学校体育や学校部活動と地域の生涯スポーツ、障がい者スポーツ、トップスポーツなどの一体化が進んでいくとクラブに求められる使命の達成に向かっていくと思います。

師岡 スポーツ庁設置の話題も含め、今回の開催決定は、日本の体育・スポーツ制度を根本的に考え直すチャンスでもあります。日本では、明治維新の学制とともに西欧文化であるスポーツを学校に取り入れましたが、当初は「チャンピオンスポーツ（一番を目指して競い合うスポーツ）」と「スポーツ・フォア・オール（みんなで楽しむことに重点をおいたスポーツ）」の両方の考え方が共に導入されました。しかし、当時の日本では、「富国強兵」「国威発揚」の流れの中で、学校体育や部活動で時には行き過ぎた

勝利至上主義の指導が行われ、それが今日まで受け継がれてきてしまい、少なからずスポーツ嫌いを生み出してきました。

勿論、勝利を目指して極限まで己を鍛え上げ、全力を尽くして競技することとはスポーツの大切な要素であり、深い達成感と見る者を感動させる力の源であることは間違いありません。そのことは、オリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く」に表されています。その一方で、有名な「参加することに意義がある」もオリンピックから生まれたスポーツのあり方を示す言葉です。

本来、「チャンピオンスポーツ」と「スポーツ・フォア・オール」は車の両輪のように相互補完的に一体となって推進されるべきものです。チャンピオンスポーツは「見る」「支える」がなければ成立しませんし、一方でチャンピオンスポーツがなければ、憧れや感動からスポーツを始める人は減少してしまうでしょう。

日本の学校体育制度は、ハードもソフトも世界に誇れる素晴らしいのですが、学校を卒業した後、スポーツを続けていく受け皿が整備されていないという課題があります。幅広いジャンルを持ち、多様な楽しみ方がある音楽は嫌いな人はおらず、全ての人が生涯を通じて「音を楽しむ」ことができるように、スポーツもチェスやブリッジがIOC公認スポーツである事実を伝え、人々

の意識を変え、全ての人が生涯を通して「楽しむ」ことができる文化であることを伝え、環境を整備していく必要があると思います。

そこで、今回のオリンピック・パラリンピック開催決定を機に、スポーツには多様な楽しみ方と多様な種目があることを伝え、また学校体育の段階で地域スポーツと接点を持ち、卒業してからは地域のクラブでスポーツを楽しむことができる「生涯スポーツ社会」を構築するというレガシーを残していくべきでしょう。そうすればヨーロッパのように地域のクラブでトップアスリートが育ち、そのアスリートが指導者として地域や学校に戻ってくるという「好循環」の仕組みができると思います。

菊地 私がドイツのクラブを訪問した際には、地域のクラブからトップアスリートが輩出される仕組みもありましたが、私が特に魅力的に感じたのは、高齢者が元気に活動しているクラブでした。そのクラブの会員は、「ドイツでは税金が高くて大変な部分もあるが、このクラブにいれば誰も孤独ではなく、皆が支え合って暮らしている。それがクラブだ」と語っていました。日本のクラブにはそういった「地域にある自分の居心地の良い場所」「自分の居場所」としての機能がまだまだ弱いと思いますね。

師岡 これまで日本では、スポーツは衣食住のように生存に必要なものでは

ないとされて脇に置かれ、「時間や金銭的な余裕があればスポーツをする」といった感覚であったと思いますが、これからは、スポーツは「生活の一部」として捉えていく必要があると思いますし、その意識の変化をオリンピックを通じて醸成していきたいですね。



3 地域スポーツや総合型クラブが 2020年東京オリンピック・パラリンピック に向けてできること

地域スポーツが2020年
オリンピック・パラリンピックに
向けてできること

師岡 「地域スポーツ」という視点で、
2つお話しします。

1つ目は、とにかく今はスポーツに
「追い風」が吹いている状態ですので、
今までスポーツに関係がなかった方々
にも呼びかけ「スポーツを通じた地域
活性化」という共通認識を地域で持つ
ことができるという点です。ただし、
ここで気をつけていただきたいのは、
まずは自分たちがオリンピック・パラ
リンピックに対して何ができるかを考
えることが先であるということです。
私は、昨年9月の講演(注1)後、様々
な地域で講演を依頼されました。そこ
では、地域の方から「オリンピックで地
域が活性化しますか」等の質問をいた
だきます。しかし、日本はオリンピッ
クを立派に開催することを世界に約束
したわけですので、まずは私達人ひと
りが「何ができるか(What)」を考え
ることが先であり、それを考え実行す
ることで、「恩恵を受ける(take)」こと
ができるのです。

また、よく「地方には関係がない」と
いう話を聞きますが、そんなことはあ
りません。文部科学省が先日(2014
年1月14日)、公表した「夢ビジョン
2020(注2)」にも取り上げられて
いますが、私は長野オリンピックの際に

行った1校1国運動を参考に、「1市町
村1国運動」を提案しています。多く
の発展途上の国々はオリンピックの直
前合宿を行う金銭的余裕がありません。
そこで市町村を挙げて体育施設や
民宿を用意して、それらの国々の直前
合宿場所として提供します。滞在費な
どを市町村が負担する代わりに地域の
学校や施設に訪問してもらい、子ども
達や地域住民と交流してもらいます。
そういった取り組みは、必ず感謝され
るでしょうし、地域の子どもたちにとっ
ては、たとえ有名な選手でなくても、
国の代表選手と触れ合う機会を得るこ
とで、1964年当時私が経験したよ
うに「世界」を体感できることでしょう。
こういった取り組みは、2002年の
サッカーワールドカップでカメルーン
代表を受け入れた大分県中津江村(現
日田市)のように、実は全国の市町村
で実施できますし、それが本当の意味
での「おもてなし」であると思います。
また、こうした取り組みの運営主体を
総合型クラブが担うことができれば、
クラブの認知度向上にもつながります。
2つ目は、地方行政のスポーツ振興
に拍車がかかるということです。地方
においても、必ずオリンピックに向け
て「我が地域では何をするべきか」とい
うテーマが議会などで取り上げられる
でしょう。私はその前に、地域スポー
ツ団体が自ら積極的に提案していくべ
きだと思います。

注1)
師岡氏は、2013年9月8日に開催された、
「2020年オリンピック・パラリンピック開
催地決定を迎える会」において、「招致活動
で得たもの」をテーマに講演を行った。

注2)
夢ビジョン2020(文部科学省版)について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/01/1343297.htm





例えば、オリンピックに関連して、今後全国的に行われる活動として聖火リレーがあります。1964年の時には、聖火リレーは太平洋戦争の激戦地だった沖縄からスタートしました。当時、返還前で日本国旗を掲げることができなかった沖縄県で日の丸のユニフォームを付けて走る姿が人々の感動を呼びました。そのように、我が地域

を走る意味を伝えることができれば、聖火リレーを自分達の町に呼ぶことができるかもしれません。

さらに言えば、「生涯スポーツの核たるクラブの拠点施設を聖火リレーが通るべきだ」という提案もできると考えられます。

クラブが2020年

オリンピック・パラリンピックに向けてできること

菊地 クラブとしてできることは、師岡先生とお話する中でたくさん出てきましたし、クラブであれば実現可能だと思います。私が住む神奈川県川崎市においても、2020年に向けて運動施設の改修などの話題が出ています

が、クラブとして大事なことは、自分達が持つ資源を活用しながら思い切った取り組みをすることです。そして、自分達には何ができるのかということ、を、夢を持って語り合うことでしょう。

師岡 私が所属する上智大学では、2019年ラグビーワールドカップと2020年オリンピックに向けて大学としてできることを検討する全教職員を対象としたプロジェクトを立ち上げました。それと同様に、クラブが主体的に地域の議員や町内会の役員や商店街など、様々な人達を集めて、地域でオリンピックに向けてできることについてアイデアを出し合うという活動をし

てみてはいかがでしょうか。例えば、まだどこの国とも姉妹都市になっていない国と姉妹都市提携するというアイデアは面白いと思います。また、個々のクラブ単位では、オリンピック種目の紹介やオリンピック選手を招聘したイベントの開催ということも考えられるでしょう。

クラブこそパラリンピックを応援しよう！

師岡 パラリンピックの話をお願いします。

『オリンピック憲章』の「オリンピックの根本原則」には、「スポーツを行うことは人権の1つである」「すべての個人はいかなる種類の差別もなく、オリンピック精神によりスポーツを行う機会を与えられなければならない」と書かれています。このオリンピックの原則はクラブにも共通している考え方だと思います。障がい者、健常者分け隔てなく参加できる総合型クラブ運営をして、パラリンピックを特に積極的に応援してほしいですね。

菊地 私のクラブには障がいのある方も所属していますが、その方々もオリンピックの開会式に何かしら参加できないかと思いを馳せています。障がいのある方でも参加できるクラブだからこそ、オリンピックだけでなく、パラリンピックに向けた活動も展開できるのではないかと思います。

「おもてなし」のために「地域を知る」「国を知る」

師岡 オリンピック・パラリンピックを通じて、日本人は、「自分たちの地域にある魅力」や「日本のスポーツが持つ魅力」に気づくことも必要です。先ほどからお話している「自分達ができること（＝おもてなし）」を考える上では、「自分の地域」について知らないという点もできません。また、スポーツ文化に関しては、必ずしも西欧スポーツ文化だけが素晴らしいというわけではなく、日本の武道が持つ所作や礼儀、「心技一体」という考え方や、日本にも世界にアピールすべき文化があると思います。こういった自分たちの地域や国が持つ魅力にも目を向けてみる必要がありますね。

まとめ…総合型クラブと2020年東京オリンピック・パラリンピックはどのように関わるか

菊地 2020年オリンピックに向けては、個々のクラブによる取り組みとSC全国ネットワークのようなネットワーク組織による取り組みという2つの視点で考える必要があります。個々のクラブにおいては地域の様々な団体を巻き込んで、SC全国ネットワークにおいてはクラブ同士で集まって、色々なアイ

デアを出し合うことが、これからまず取り組むべき事柄だと思います。

現在、クラブが抱えている大きな課題としては、クラブの「自立・自律」「認知度向上」の2つがあります。オリンピックは、これらの課題を解決するチャンスであり、SC全国ネットワークが一つの目標に向かってまとまるチャンスでもあると思います。そのためには、個々のクラブがそれぞれの地域で積極的にオリジナリティのあるアイデアを関係各所に提案していく、そして各クラブの取り組みをSC全国ネットワークが責任を持って取りまとめていく、ということが必要になってくるでしょう。

現在、私が所属している(一社)神奈川県総合型スポーツクラブ連絡協議会(KSN)では、2020年オリンピックに向けて、全加入クラブで英語教室の展開を始めています。英語ができなければ、ボランティアをしなくてもできませんので、多くの方が、オリンピックまでには英語を怖がらずに話せるようにしていきたいと思います。

師岡 総合型クラブが2020年までに取り組むべき事柄について、4点お話しします。

1つ目は、オリンピックの開催を通じて、レガシー(遺産)を開催地に残さなければならぬということです。『オリンピック憲章』には、「IOCの使命と役割」として「オリンピック競技大会の良い遺産を、開催国と開催都市に残

すことを推進すること」と書かれています。日本の場合、それは超成熟社会においてスポーツによって人々が幸せに暮らすことのできる立派な社会であることを世界に示すことです。つまり、世界に生涯スポーツ社会としての日本を見せるということです。そして、その活動主体は国民一人ひとりですが、核となる組織は総合型クラブだと思います。

2つ目は、これまでスポーツに関心のなかった地域住民に対してもアピールできる機会ができたということです。スポーツに限らず、オリンピック関連の活動を総合型クラブが行うことで、地域の方々に関心を持ちます。その方々を巻き込んでいくことで、クラブが地域を盛り上げる「軸」となります。

3つ目は、「情報の共有・ネットワーク化」です。私は、都体協の総合型クラブ育成委員として、また千代田区クラブ設立準備委員長としてこれまで活動してきましたが、そこで感じたのは、「クラブ間で情報をもっと共有化すべき」ということでした。そこで、(一社)東京スポーツリンクの副理事長として、都内全クラブを束ねて情報公開にも取り組みましたが、全国規模のネットワークを構築する必要があると思っています。約3400のクラブが一つになり行動を起こすことができれば大変大きな力になると思います。

4つ目は「するスポーツ」の拡大につ

ながるということです。オリンピック競技大会自体には、一般の方は「見る」「支える」という関わり方しかできませんが、「見る」「支える」を通じて、「する」につながると思います。2021年5月には誰でも参加できる「ワールドマスターズゲームズ」が関西で開催されます。この流れを活かして、スポーツをしていない方が、生活習慣としてスポーツを行う社会に変化させていくことが大切です。クラブが果たすべき役割は「する」場所の提供にあります。最近では、アルツハイマー病の予防・改善に有酸素運動が効果的であることが証明されたそうです。医療費削減のためにもスポーツを「する」場所を提供する総合型クラブに寄せられる期待は大きいと思います。

終わりに

師岡 「6年後」という期間が大変良いと思います。「10年後」だとまだ先のこのように感じますが、「6年後」は、意外とすぐにやってくるという感じがします。したがって、「今、行動しよう」という気持ちを私たちに抱かせてくれる現実的な数字と言えます。

また、オリンピック憲章(注4)を読んだことがある方は意外と少ないので、ぜひ一読していただきたいですね。

(終了)

■師岡 文男(もろおか ふみお)

上智大学文学部教授(保健体育研究室長)。
日本オリンピックアカデミー前理事。世界最大のスポーツ組織、国際スポーツ団体総連合(スポーツアコード)前理事。東京都スポーツ振興局招致推進部アドバイザー。
文部科学省科学研究費受給研究「オリンピック競技大会の招致問題に関する総合的研究」をはじめ、オリンピック・パラリンピック競技大会に関する造詣が深い。また、東京都のスポーツ振興を目的とした「(一社)東京スポーツリンク」の副理事長として、総合型地域スポーツクラブの振興にも携わっている。
昨年(2013年)、東京商工会議所で開催された招致委員会・東京都共催「2020オリンピック・パラリンピック開催都市決定を迎える会」において、「招致活動で得られたもの」をテーマに講演を行った。

■菊地 正(きうち ただし)

NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF副理事長。
神奈川県川崎市で平成18年に学校を拠点として同クラブを設立。会社経営で培ったノウハウとリーダーシップを発揮し、地域から愛されるクラブづくりに尽力している。
クラブは、文部科学省「地域スポーツとトップスポーツの好循環推進プロジェクト」事業を受託し、「拠点クラブ」としても活動している。
現在、公益財団法人日本体育協会地域スポーツクラブ育成専門委員会中央企画班員、日本体育協会総合型クラブ公式メールマガジン編集委員長を務める。

宣言しよう、フェアプレイ。

宣言しよう。

全力をつくし、挑戦し、
楽しむことを。

宣言しよう。

仲間を信じ、思いやることを。

宣言しよう。

約束を守り、応援してくれる人への
感謝を忘れないことを。

その誓いは、スポーツを

もっと楽しいものにしてくれる。

日々の生活を

もっとすがすがしいものにしてくれる。

そして多くの人々を活気づけ、

今の日本を元気にするチカラにも
なってくれる。

さあ、あなたも手を胸に。

フェアプレイの誓いを。

フェアプレイで
日本を元気に

あくしゅ、あいさつ、ありがとう

「フェアプレイで日本を元気に」キャンペーンで、
フェアプレイの輪を広げ、日本をもっと元気に!

あなたもはじめの一歩を、まずはホームページで、

フェアプレイ宣言

検索



日本体育協会は、スポーツ立国の実現のため、国民体育大会をはじめとする各種スポーツ大会の実施やスポーツ指導者の育成等を行うとともに、スポーツの持つ価値や意義を広くアピールし、国民の生きる力の育成と活力ある社会の構築に貢献していきます。また、日本をもっと元気にしたい。その思いから、「フェアプレイ宣言」推進の取り組みも行っています。



公益財団法人

日本体育協会

わたしたちは、「フェアプレイで日本を元気に」キャンペーンを応援しています。

asics

大塚製薬

mizuno

三井住友海上
MS&AD INSURANCE GROUP

LAWSON

LOTTE

SUNTORY